

## 大伴家持の「鳥歌」

### はじめに

大伴家持はウグイスとホトトギスを万葉集で最もうたった歌人である。その一方で、都鳥、燕などは、家持に一首うたわれた。一首のみに登場とすれば、カモメも舒明天皇にうたわれただけである。都鳥をカモメの一首と考えれば、二首にうたわれたことになるが、その意味でも微妙な歌があつて、六百首ほどある鳥の歌が種類などもどこまで拘るべきか、不明瞭な問題にしばしば出逢う。家持に関して言えば、霍公鳥という表記とも関わりを持つが、ホトトギスカカッコウかといった議論も当然出てくる。ここでは、万葉歌で一応ヒバリ、ウグイス、ホトトギス、タカ、カモ、ツバメといった言葉が詠われているかどうかで判断する。そして「鳥」乃至鳥の種類を歌語としている歌を、「鳥歌」とする。また、万葉集の表記の独自性でもあるが、ホトト

森

斌

ギスはカッコウとホトトギスを含めているらしいが、個別の論証が不可能であるので全てホトトギスとして処理する。そこで家持の鳥の歌百二十二首であるが、歌番号と鳥乃至その種類を資料として最後に示す。

### 一家持と鳥

表から知られるのは、四百七十三首を万葉に載せる家持であるが、植物を読み込んだ歌について鳥の歌もそれなりに多い。万葉全体で一割以上が家持の歌である。鳥をうたう歌は、万葉で約六百首であるから、その中でも家持が鳥の素材は、比率が月や風、そして雪よりもかなり高い。その鳥では、ウグイス、ホトトギスが主要な鳥の種類である。万葉集の鳥は一般的には、鳴く声に魅力を感じている。意外なのは、家持がタカを主題とする長歌を二首作っていて、歌数もそうであるが、わざわざタカを主題にした歌人は他

にいないので貴重な歌である。そこで歌数からも主要なウグイスとホトトギスを考察する前に、特徴を指摘できるその他の鳥について考察する。ツバメも万葉集に一首であり植物のワラビ同様に平安時代の貴族にうたわれていない。

話題としては竹取物語に燕の巣にある子安貝を難題で課せられた石上中納言の話がある。家持のツバメは素材として興味深い、帰る雁に主体があるので、ツバメは春という季節として提示された存在である。そのことは、同時に詠まれた第二首に山を越えてくるカリがうたわれていることで明白になる。カリも秋の到来よりも春の帰郷が家持にとって興味深いことに、カリの歌が約六十首もありながら家持のだけが帰雁をうたっているという個性がある。

そもそもツバメが現在日常的であるが、案外説話を含めて身近ではなかったらしい。近年になって人家そばで多数の巣を見つけることができるようになった。そのツバメが低く飛ぶと雨が降るといわれ、庶民のお天気予報にも使われている。雀孝行の話では、親の死に目に雀はなりふり構わず駆けつけたので間にあつたが、燕は支度し時間をかけて親の死に目に間に合わなかった、という話である。以来、神様は親孝行の雀には五穀を食べて暮らせるようにしたが、燕には虫しか食べられないようにした、という。一方、カ

リとは秋から冬にかけてシベリア方面より飛来、春に帰る渡り鳥である。

記紀にすでにみられるのは、靈魂を運ぶ鳥として信じられていたことである。万葉集には、約六十首に見られ、ホトトギスに次いで詠まれた。秋を代表する景物だか、帰雁は春の訪れ告げる光景としてもよまれたがわずかに二首のみである。カリガネという語はカリを指すが、本来「雁が音」で鳴き声を意味した。和歌では鶴などと同様に聴覚的にとらえられることが多い。越中万葉歌には、『漢書』蘇武伝の故事を踏まえ、遠く離れた人の便りを運ぶ使者としてとらえた歌（三九五三）がある。卷十七・三九四七の「遠つ人」は「雁」にかかる枕詞。春の帰雁を詠んだものが二首（四一四四、四一四五）である。家持が詠んだカリについては家持の鳥表を参考にしてほしい。

#### 帰る雁を見る歌二首

燕来る時になりぬと雁がねは国偲ひつつ雲隠り鳴く  
(十九・四一四四)

春まけてかく帰るとも秋風にもみたむ山を越え来ざら  
めや（一に云ふ「春されば帰るこの雁」）(十九・四一四五)

来燕は、家持の詩にも用いられたのであるが、歌ではツバメがくる春にこだわったのは、むしろ帰雁をうたいたいかったからであつた。

家持は天平十九年三月四日に大伴池主から七言詩を贈られていた。そこで翌五日に詩を作り、池主に贈っている。詩の評価は別にすれば、この詩を背景にした和歌を創作したのは、やはり家持であつた。積極的に漢詩の世界を和歌の世界に取り入れようとした姿勢がある。巻十七・三九七六番の詩序である。

#### 七言一首

杪春の餘日媚景麗しく、初巳の和風拂ひて自らに軽。

来燕は泥を銜みて宇を賀きて入り、歸鴻は蘆を引きて  
迥かに瀛に赴く。

聞ならくは君は侶に瀟きて流曲を新たにし、褰飲に爵  
を催して河清に泛べつと。

良きこの宴を追ひて尋ねまく欲りすれど、還し知る懊  
に染みて脚の跣<sup>れいて</sup>ずることを。

ツバメも和歌でうたわれるのは珍しい。カリは万葉集では一般的な鳥である。ところが帰雁となれば家持の二首に

しか歌われていないのであるから、それだけでも家持歌が個性的になる。加えて一首には帰るカリがうたわれて、ツバメとの組み合わせある。カリとツバメがうたわれたのは、ここだけになる。類型的なカリをうたつたわけではなし、ツバメも和歌として素材になりにくいのであるから、家持は伝統を十分配慮しながら、その類型を打ち破る創意を凝らしてツバメとカリをうたつたことになる。この帰る雁で興味深いのは雁の北にある故郷である。詩に「歸鴻は蘆を引きて迥かに瀛に赴く」とあつて、現在の日本海の彼方という。その「国偲ひつつ」とは、シベリアなどというのであらう。家持は渤海の存在をしっていて、渤海使に贈る送別の歌（四五―四）があつて、どこまで世界を想像していたかが問われる。中西進氏は、千田稔氏が指摘した「雁の道」として「北の異人の国」としている<sup>(1)</sup>。

次にやはり万葉集で一首だけうたわれた都鳥を取り上げる。都鳥とは、ユリカモメのことであらうか。それにしてもさまざまな鳥の種類を積極的に歌に取り入れようとしている。家持は天平勝宝八歳（七五六）三月に詠んだのであらう。三月一日に聖武、孝謙、光明子という行幸が難波にあつたことが推論の根拠である。そこでは家持も歌を詠んだ。伊藤博氏は、伊勢物語第九段の話の先蹤をなすと指摘

する。<sup>(2)</sup>

舟競ふ堀江の川の水際に来居つつ鳴くは都鳥かも（二

十・四四六二）

都鳥といえは、伊勢物語か、古今集をまず思い浮かべる。都鳥は古今集と伊勢物語にとられた歌に出ている鳥である。ここでは古今集巻九・四十一番で引用する。詞書きが長いので、詞書は一部の引用である。

さる折りに、白き鳥の嘴と足と赤き、川のほとりに遊びけり。京には見えぬ鳥なりければ、皆人見知らず。渡守に「これ何鳥ぞ」と問ひければ、「これなむ都鳥」と言ひけるを聞きて詠める、在原業平朝臣

名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと（古今 四一一）

引用した歌は、隅田川で詠んだという。武蔵と下総の境をなす川である。その鄙の地に相応しく思われない雅な都鳥が望郷を募らせて、現在の不遇と重なる。その論理は、

伊勢物語の方法であろうが、もう一首業平の東下りに関連して伊勢物語十段でも同様である。

すむ所なむ人間の郡、みよしのの里なりける。  
みよしののたのむの雁もひたぶるに君が方がぞよると  
なくなる

これは、大和「み吉野」と武蔵入間郡の「みよしの」の里が固有名詞で重なるところに雅な歌枕と鄙との対比があるのである。父の名前はほかしつつ並の貴族としていても母が藤原であるという前提がこの歌の背景にあつて、貴種流離であることを匂わせていて、女に歌を贈っている。女がみよしのの里に住むのであるから、あの歌枕吉野を連想させる。男は都人という設定であつても、「みよしの」のとはあることで、女の素性もほぼ想像される。即ち土佐日記でも池の女と呼ばれるのは、男と一緒に下ってきた都の女性であり、ここでは母親はもともと都の人でありながら、土着した豪族に嫁いだその娘と言うことである。万葉と古今の東下りに共通するのは、都鳥という都と鄙との対照である。そこから業平の話は、貴種流離という展開を示し、さらに鄙の女性と貴人の恋を絡ませて、在原業平像を展開さ

せていて、雅な人間に、あるいは好色に発展させている。そこまで万葉歌に行動させる像を語らせる力があるかどうか。ちなみに藤河家利昭氏は、伊勢物語の章段について、「歌に詠まれる景物から掛詞、見立て、序詞、擬人化などの歌の技法によって行為を描いている」とした<sup>(3)</sup>。その意味では、万葉集にもその技法があれば、さらに歌物語として展開していくのであろう。万葉集はまだ歌語りの範疇であったことになる。

家持は武人であるのか鷹狩を好んでいたようである。タカとは、タカ目タカ科に属する鳥のうち比較的小さ目のものを指すようである。そして、比較的大きいものをワシ、小さめのものをタカと呼び分けている。鷹狩りとは、タカなどの鳥を使った狩猟である。ハイタカ、及びハヤブサ等を訓練し、鳥類やウサギなどの小動物を捕らえさせ、餌とすりかえる。鷹を飼育して訓練する人は鷹匠と呼ばれる。また、鷹を訓練する場所を鷹場と称されるので、それなりの人でなければ行えない。すなわち一般的には貴族の遊びである。近代以前は、東は日本、西はアイルランド、北はモンゴル、スカンディナヴィア、南はインドに至るユーラシアと北アフリカ全域で各地方独特の鷹狩文化が開花していた。日本の鷹狩りは、中国というよりも朝鮮半島百濟経

由で日本にももたらされたのであろう。中西進氏は、「鷹狩」（とがり）を朝廷では鷹甘部において鷹を飼育したとして、一種のステータス・シンボルではないかとして、家持のダンディイズムとかかわらせて「ハイカラな趣味」とする<sup>(4)</sup>。

家持はタカを主題とする二首の長歌（十七・四〇一一、十九・四一五四）を作る。いずれも越中で試みられていて、鄙の地では鷹狩りも武人として楽しみだったのであろう。この二首の長歌はタカを主題としながら、相違点も多いが、道行きの形式、独詠、タカに対する愛情等で一致する。そこで天平十九年（七四七）九月二十六日の日付を持ち、家持三十歳の作品のみ引用する。

放逸せし鷹を思ひ、夢に見て感悦して作る歌一首  
（并せて短歌）

大君の 遠の朝廷そ み雪降る 越と名に負へる 天  
さかる 鄙にしあれば 山高み 川とほしろし 野を  
広み 草こそ繁き 鮎走る 夏の盛りと 鳥つ鳥 鵜  
養が伴は 行く川の 清き瀬ごとに 簪さし なづさ  
ひ浜る 露霜の 秋に至れば 野もさはに 鳥集けり  
と ますらをの 伴誘ひて 鷹はしも あまたあれど

も 矢形尾の 我が大黒に「大黒といふは蒼鷹の名なり」白塗の 鈴取り付けて 朝狩に 五百つ鳥立て夕狩に 千鳥踏み立て 追ふごとに 許すことなく手放ちも をちもかやすき これをおきて またはありがたし さ馴へる 鷹はなけむと 心には 思ひ誇りて 笑まひつつ 渡る間に 狂れたる 醜つ翁の言だにも 我には告げず との曇り 雨の降る日を鳥狩すと 名のみを告りて 三島野を そがひに見つつ 二上の 山飛び越えて 雲隠り 翔り去にきと帰り来て しはぶれ告ぐれ 招くよしの そこになければ 言ふすべの たどきを知らに 心には 火さへ燃えつつ 思ひ恋ひ 息づき余り けだしくも あふことありやと あしひきの をてもこのものに 鳥網張り 守部を据ゑて ちはやぶる 神の社に 照る鏡倭文に取り添へ 乞ひ袴みて 我が待つ時に 娘子らが 夢に告ぐらく 汝が恋ふる その秀つ鷹は 松田江の 浜行き暮らし つなし捕る 水見の江過ぎて 多胡の島 飛びたもとほり 葦鴨の 集く古江に 一昨日も 昨日もありつ 近くあらば いま二日だみ遠くあらば 七日のをちは 過ぎめやも 来なむ我が背子 ねもころに な恋ひそよとそ いまに告げつる

(十七・四〇一二)

矢形尾の鷹を手に据ゑ三島野に狩らぬ日まねく月そ経にける (十七・四〇一二)

二上のをてもこのものに網さして我が待つ鷹を夢に告げつも (十七・四〇一三)

松反りしひにてあれかもさ山田の翁がその日に求めあはずけむ (十七・四〇一四)

心には緩ふことなく須加の山すかなくのみや恋ひ渡りなむ (十七・四〇一五)

右、射水郡の古江村にして蒼鷹を取獲る。形容美麗しく、雉を捕ること群に秀れたり。ここに養吏山田史君麻呂、調試節を失ひ、野狐候を乖く。風を搏つ翹は、高く翔りて雲に匿り、腐鼠の餌も、呼び留むるに験靡し。ここに羅網を張り設けて、非常を窺ひ、神祇に奉幣して、不虞を恃む。ここに夢の裏に娘子有り。喩へて曰く「使君、勿苦念を作して空しく精神を費やすこと。放逸せるその鷹は獲り得むこと幾だもあらじ」といふ。須臾にして覚き寤め、懷に悦び有り、因りて恨を却つる歌を作り、式ちて感信を旌す。守大伴宿祢家持「九月二十六日に作る」

まず長歌は、万葉集中で第四番目に句数が多い。全百五句の長編であり、家持自身でも陸奥に金が産出した詔書を喜んだ歌（十八・四〇九四）の百七句に次ぐ。また、大越喜文氏は、「際立つ長編で、素材・歌材、形式、構成、内容と悉く独特で、しかも越中歌日誌上孤立的な位置」にあるとする。<sup>(5)</sup>

冒頭は越中の紹介とその地で鷹狩りを楽しんでいたのに、「養史山田史君麻呂、調試節を失ひ、野狐候を乖く。風を搏つ翹は、高く翔りて雲に匿り、腐鼠の餌も、呼び留むるに驗靡し。ここに羅網を張り設けて、非常を窺ひ、神祇に奉幣して、不虞を恃む。」ということになる。悪いのは歌では醜い翁であるが、鷹を逃がしてしまつてはいかなる方法でも鷹を捕まえられなかったのである。ところが、家持は夢のお告げをうけた。その内容も具体的に詳しい。「娘子らが夢に告ぐらく、汝が恋ふる その秀つ鷹は 松田江の 浜行き暮らし つなし捕る 氷見の江過ぎて 多胡の島 飛びたもとほり 葦鴨の 集く古江に 一昨日も 昨日もありつ 近くあらば いま二日だみ 遠くあらば 七日のをちは 過ぎめやも 来なむ我が背子 ねもころに な恋ひそよとそ いまに告げつる」と地名も具体的に、松田江、氷見の江、多胡の島、古江と道行きである。この道行は国

府から遠ざかっている。その点にタカが戻ってこないという暗示をさせている。さらに日も、二日、七日といって、日数も増えている。

この歌に関して興味深い指摘を伊藤博氏はする。<sup>(6)</sup>京に持ち帰った越中の三賦などが評判が良くて、「三、四か月、都に滞在した空間が、それ以前の越中における作家活動を完全に消化し受肉する糧になったかのような成長」をこの作品に指摘している。天平十九年五月上旬頃に都に戻っていた越中守家持が九月になって作った初めて作った、そして大作である。素材は、鷹狩りであるから、飼育と狩猟が天皇によって仏教の配慮で元正、聖武、淳仁、光仁と禁止になつていたはずであるが、越中では行われていたのであろう。都では慎まれる鷹狩りも地方ではお構いなしであつたらしい。禁煙に対する都市と鄙との温度差が見られるが、なかなか地方まで主旨が伝播するのにも時間がかかるようである。それにしても、夢占いまで登場させて帰還を願つた。もともと有能な鷹が愚かな飼育係によって逃がしてしまった悔しさが主題の歌であるが、丈夫家持の面目躍如である。部下に対して寛大な人間である家持も、養史山田史君麻呂を「狂れたる 醜つ翁の 言だにも 我には告げず」という罵倒をするのであるから、鳥好きも本物である。



この長歌では短歌が反歌とも、短歌とも記されずに四首も添えられている。長歌から独立していそうで長歌との内容に関わっている。家持の新しい長歌と短歌の組み合わせであろう。

さて、神仙世界に通じる具体的な描写であるが、父旅人にあこがれると同時に、鷹狩りを個人的に好むということよりも、武門の一員として若き貴公子であることを誇ろうとする自賛がありそうである。越中守の任が終わり、都に戻るときにうたった歌には、次の歌があった。

石瀬野に秋萩しのぎ馬並めて初鳥狩だにせずや別れむ  
(十九・四二・四九)

ところで家持は春愁愁思の歌人である。とりわけ越中では、春にひとりの気持ちを歌うことが目立つ。ヒバリは万葉集で三首にうたわれたが、二首が家持の作品である。ヒバリを歌うのは、三首の絶唱といわれる中での一首である。そもそもヒバリは河原、農耕地、草原などに生息する。食性は植物食傾向の強い雑食で、主に種子を食べるが昆虫なども食べる。地表を徘徊しながら採食を行う。飛翔したり草や石の上などに止まりながら囀る。和名は晴れた日に囀

ることに由来する説や、鳴く声に由来する説もある。地表を掘り植物の葉や根を組み合わせたお椀型の巣をメスが作る。

鳴き声を主にするのはホトトギスとウグイスが主である。ウグイスは春季に縄張りを主張するために鳴き声を挙げることから春の風物とされる。ヒバリもウグイス同様に春という季節に強く結びついている。鳴き声に魅力があったのであろうが、ヒバリは天空に舞い上がりながら鳴き声を響かせていて、その活躍する場が視界のいいところが多いので姿を目にする機会も多い。三十六歳の家持は、そのヒバリを次のようにうたう。

#### 二十五日に作る歌一首

うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとり  
し思へば (十九・四二・九二)

遅々に鶺鴒正に啼く。悽惻の意、歌に非ずは撥ひ難きのみ。よりにてこの歌を作り、もちて締緒を展ぶ。但しこの巻の中に作者の名字を僞はずして、ただ年月所処縁起のみを録せるは、皆大伴宿禰家持が裁作る歌詞なり。



四二九二番の中心は「心悲しも」にある。左注の鶇鶇をヒバリとするか、ウグイスとするかの問題があつても、どちらとも春という長閑な生命力のある季節に結びつく。春のうらうらに相應しいのは、悲しいことではない。しかし、第五句は「ひとりし思へば」とある。このうらかな春日とひとりという対象を結びつけるのが「ひばり上がり心悲しも」ということであろう。「ひとりし思へば」の「ひとり」という理解については、最も適切な表現で説明するのが針原孝之氏で、「宮廷に存在しない自分で悲しみ、官人たちの場から離れた所にいる」という<sup>(7)</sup>。

家持の鳥の歌は、孤立した種類の鳥をうたったタカ、ツバメにしても、個性的な内容がある。タカを長歌でうたう人はいなかったし、カリも珍しい去る鳥としてうたう。ツバメも勅撰集でも珍しい鳥であつて、来る春であつて、去る秋ではない。そういった春の季節、或いは形式等でも、類型を探し得ないのである。十二首のウグイスと六十六首のホトトギスをうたう歌は、はいかなる個性や特徴が指摘できるのであろうか。

## 二 ウグイス

梅に鶇という諺がある。梅に鶇とは組み合わせのことで

あり、案外写実的ではない。それは、梅に来る鳥は、目白、ヒヨドリ、雀、四十雀などであり、梅に鶇は歌ほど一般的ではない。梅は春を待つ人々に咲きかけ、春告鳥とも言われるウグイスは春の訪れを人々にうたいかけた。この二つを取り合わせることは、この上もなく春の訪れを盛り上げる。

しかし、和歌や絵画に好んで取り上げたのは梅にウグイスがよく来るからではない。むしろ写実的なのは、藪にウグイスという言葉である。ウグイスの習性からは、鳴き声を人に見られるようなことは少ない。それは藪を好むためである。

家持が鳴き声を待ちに待っていた鳥がウグイスとホトトギスである。ウグイスは、天平二十年二月であらう、四〇三〇番で、鳴き声が遅いといつて嘆いている。

鶇の晚く唄くを恨むる歌一首

うぐひすは今は鳴かむと片待てば霞たなびき月は経につつ（十七・四〇三〇）

藪の中を枝渡りしながら活発に移動し、そこにいる昆虫などを食べるのウグイスである。

林床にササが密生している場所を好み、営巢する。枕草

子には、宮中で鳴かないウグイスが庶民の居るところでは盛んに鳴くという。ウグイスの習性からは、あまり整理整頓されて管理された宮中などいい迷惑な場所であったのであろう。さえずりはよく知られるホーホケキョと表される。冬はチャツチャツと鳴きながらあまり注目はされないが、

「笹鳴き」と呼ばれる。ウグイスの初鳴きは下手でありながらも心惹かれる。来燕は、家持の詩にも用いられたのであるが、歌では燕がくる春にこだわったのは、むしろ帰雁をうたいかつたからであつたし、たまたまであろうがウグイス、ツバメ、帰雁が二月の出来事であつたのであろう。

最近の温暖化かもしれないが、二月中旬からウグイスが鳴いていることが多い。おそらく旧暦では一月の梅と重なり、鳴き声に敏感であつた奈良貴族には待ち焦がれたであろう。家持は処女作でウグイスをうたう。ウグイスがうたわれた歌数は十二首である。傾向としては、ホトトギスと異なり越中から都に戻ってから、ホトトギスよりもウグイスの方が歌数が多い。それなりに歌われるようになるのは、理由も存在しているのであろう。花よりも植物一般が好きになり、鳥も愛で月夜に宴を開いたのが少納言時代である。ちなみに習作時代の一首は次の処女作である。天平五年の

作と考えられ、十五歳の歌である。

#### 大伴宿祢家持が鶯の歌一首

うち霧らし雪は降りつつしかすがに我家の園にうぐひす鳴くも（八・一四四一）

初期の作品にその歌人の諸々の本質が現れているとよく言われる。ここでは、連想の冴えが窺い知られる。すなわち、雪―梅―鶯である。その梅を省略して雪と鶯を結びつけたのが家持の手柄であつた。もう一つは、音感が優れていることである。雪で見えないが鳴き声として鶯が庭にいるという。この聴覚を用いた言語表現にも家持の個性が伺われる。十五歳で鶯をうたつたが、それから十五年後の三十歳までうたうことがなかった。

越中に赴任した翌年である天平十九年に鶯がうたわれた。越中時代には五首の歌で鶯がうたわれた中では、鶯の飛翔描写に特質がある。これは、稲岡耕二氏<sup>(8)</sup>によってホトトギスを含めて観察力の鋭さが指摘されている。

山吹の繁み飛び潜くうぐひすの声を聞くらむ君はともしも（十七・三九七一）

うちなびく春とも著くうぐひすは植ゑ木の木間を鳴き  
渡らなむ（二十・四四九五）

藪に鶯である。それだけに藪を飛び回る飛翔の敏捷性は  
虫を捕まえるために生きていく方途であった。飛翔しなが  
らでも虫を捕まえて餌にするのである。そのためには茂み  
を飛び回り、樹幹をくぐり抜けながらも鳴くのである。こ  
のような鶯の習性、あるいは特性を理解して家持は歌を  
作っていたのである。

み園生の竹の林にうぐひすはしき鳴きにしを雪は降り  
つつ（十九・四二八六）

うぐひすの鳴きし垣内ににほへりし梅この雪にうつろ  
ふらむか（十九・四二八七）

雪と鶯、そして梅と鶯は類型的なものである。それを竹  
林の雪と鶯の組み合わせに興味を持ってうたっている。垣  
内とは垣根で囲われた場所であるが、その梅林咲く梅の  
色を雪が取ってしまうというのであろう。理屈が勝ってい  
て宴席などでは談論風発を誘ったであらう。しかし、これ  
らの二首は、天平勝宝五年一月十一日に大雪が降って二寸

も積もって詠んだという。雪がおめでたいものだけに、翌  
月二十三日の作との段差がある。また、二月十九日には、  
橘諸兄左大臣宅で宴があり、お祝いの歌（四二八九）をう  
たっていたにもかかわらず、春愁を主題にした鶯をうたっ  
た。

二十三日に興に依りて作る歌二首  
春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴く  
も（十九・四二九〇）

家持がウグイスをうたった中で最も著名な作品を引用し  
た。家持の独自の世界とは、次の二首（四二九一）にある  
「かそけき」という表現である。これは、遙けしなどとも結  
びつくかな音に対する感動である。例えば、越中国守  
館近くに射水が流れていたのであらうが、船人の歌をかす  
かに感じている一首があった。

朝床に聞けば遙けし射水川朝漕ぎしつづ唱ふ舟人（十  
九・四一五〇）

遙かやかそけきなどは、孤愁という家持の心に結びつく

のであるが、鶯の鳴き声と孤愁とはどう関わるのであろう。「うら悲し」とは、心悲しい意味であらうか。それに対する疑問がある。すなわち、うら悲しいというのは、誉め言葉であるというのである。夕方の鶯が鳴き、さらにのどかな春野に霞みたなびくのであるから、春愁とは無縁であるという。

しかも、家持は自身の作品でも他に二首に「うら悲し」を使用している。

いかといかと ある我がやどに 百枝さし 生ふる橘  
玉に貫く 五月を近み あえぬがに 花咲きにけり  
朝に日に 出で見るごとに 息の緒に 我が思ふ妹に  
まそ鏡 清き月夜に ただ一目 見するまでには 散  
りこすな ゆめと言ひつつ ここだくも 我が守るも  
のを うれたきや 醜ほととぎす 暁の うら悲しき  
に 追へど追へど なほし来鳴きて いたづらに 地  
に散らさば すべをなみ 攀ちて手折りつ 見ませ我  
妹子（八・一五〇七）

我が背子と 手携はりて 明け来れば 出で立ち向か  
ひ 夕されば 振り放け見つつ 思ひ延べ 見和ぎし

山に 八つ峰には 霞たなびき 谷辺には 椿花咲き  
うら悲し 春し過ぐれば ほととぎす いやしき鳴き  
ぬ ひとりのみ 聞けばさぶしも 君と我と 隔てて  
恋ふる 礪波山 飛び越え行きて 明け立たば 松の  
さ枝に 夕さらば 月に向かひて あやめ草 玉貫く  
までに 鳴きとよめ 安眠寝しめず 君を悩ませ（十  
九・四一七七）

これらはまさしく心悲しい状態を言うとはいえない。しかも春の夕暮れでは四一七七番が一致している。越中では、天平十九年二月二十九日に池主に贈った三九六五の序で、

忽ちに枉疾に沈み、累旬痛み苦しむ。百神を侍ひ恃み、且消損すること得たり。而れども由し身体疼痛、筋力怯軟にして、未だ展謝に堪へず、係恋弥深し。方今春朝に春花は馥ひを春苑に流し、春暮に春鶯は声を春林に轉る。この節候に對ひ琴罇翫ぶ可し。興に乗る感有れども、杖を策く勞に耐へず。ひとり帷幅の裏に臥して、聊かに寸分の歌を作る。

とあって、突然の病に触れた。さらに体力は弱っているが、

春の朝は花の香りがいいといい、夕べには鶯が林で囀るといふ。この季節は音楽を奏で酒を飲んで楽しめべきでしよう、と言っている。但し、体力がないのでそれは適えられないので、拙い歌をうたったという。

池主も同様な立場であつたので、三九六七番序で次のように言う。

春は楽しぶ可く、暮春の風景最も怜れぶ可し。紅桃灼々、戯蝶は花を回りに舞ひ、翠柳依々、嬌鶯は葉に隠りて歌ふ。楽しむべきかも。淡交に席を促け、意を得て言を忘る。楽しきかも美しきかも、幽襟賞づるに足れり。

以上の鶯は春の景の中ではその鳴き声を楽しむべきものであつた。ところが、気分としては決して明るいものではない。病後という事もあるが現実と異なる理念を語っている。家持のウグイスは、春の花と対峙して美しいものであつたが、その鳴き声は悲しい気持ちを抱かせている。それが夕べということと重なり、春愁に至っているのである。おそらく具体的に不幸があつて、それに触発されたということよりも、ひとりを感じてしまうのであろう。その気分

が次の四二九一番では「かそけき」という心情である。

引用した歌は絶唱三首中に含まれる。この歌は、次歌の歌語「かそけき」を生むのであり、その心情は連続している。「うら悲し」も「かそけき」(四二九一)という表現が家持の独自性ということに関わると考えられる。それは、家持の聴覚にも関わり、触覚にも関わるのであるが、繊細な感性に基づく「うら悲し」い孤独である。

### 三 ホトトギス

ホトトギスは、夏になればやってきて鳴いているが、夏が終われば、鳴き声も聞かれなくなる。まさしく夏の鳥である。万葉集では、ホトトギスが鳥の中で最も多く詠まれた。その中でも越中守時代の家持を中心にした人々に多く詠まれている。中西悟堂氏は、ホトトギスが百五十六件、雁が六十三件とする<sup>(9)</sup>。一方、中川幸廣氏はホトトギスが百五十三首であり、また二番目に多い雁が六十七首であると<sup>(10)</sup>する。数から言えばホトトギスが圧倒的である。

万葉集のホトトギスがカクコウなどを含むらしいことは、指摘できても、中々その証明になると難しい。ただ、万葉集のホトトギスには、さまざまな習性のなかで比較的目立つのが鳴きながら飛ぶことであり、歌も鳴く声に集中して

いる。また、高橋虫麻呂歌（九・一七五五）や大伴家持（十九・四一六六）によって、ウグイスの巢に托卵する習性もうたわれている。

ここで言う家持のホトトギス歌は、歌中で「ホトトギス」とうたわれているか、或いは確実にホトトギスをうたったと判断される歌を指す。一般的には、ホトトギスの言葉がある歌を言うようであるが、この論ではその意味で歌数が若干多くなっている。

越中で爆発的にホトトギス歌がうたわれているのであるから、当然越中という風土も影響しているが、この論ではホトトギス歌に死者の影響があることを配慮してみたい。

まず、創作の日時で整理してホトトギス歌数を示せば次の如くである。

#### 習作時代

天平十三年（24歳）三首

天平十六年（27歳）四首

不明（天平四年から天平十六年迄か）十首

合計十七首

#### 越中守時代

天平十九年（30歳）八首

天平二十年（31歳）五首

天平感宝・天平勝宝元年（32歳）九首

天平勝宝二年（33歳）二十三首

天平勝宝三年（34歳）一首

合計四六首

#### 少納言時代

天平勝宝六年（37歳）三首

総合計66首

ここで明確なことは、まず越中時代に四十六首ものホトギスの歌を作っていた家持が、少納言時代には三首しか残していないことがある。次に夏は、四月から六月でありながら、創作が三月と四月にほぼ限定されるのであり、数が少ないが菖蒲、玉などと結びつく五月（閏五月を含む）もうたっている。鳴き声に拘りつつホトトギスと卯の花等の組み合わせにも感動していて、特定の植物が咲く時期にほぼ限定されている。橘（六十九首中二十八首がホトトギス歌）、卯の花（二十二首中十八首がホトトギス歌）、菖蒲

(十二首中十首がホトトギス歌)、棟(四首中二首がホトトギス歌)と関わる。

創作の年代が確実に知られるホトトギスの歌は、弟書持との贈答に始まる。天平十三年四月のことであるから、家持二十四歳であり、弟は家持よりも若干若かったようであるが、はつきりしたことが分らない。肩書きが記されていないので、二十一歳にいたらない任官以前なのであろうか。天平十一年夏六月二十二歳の家持が亡くなった妻を悲しむ挽歌を作るとすぐに唱和している。卷十七にある五年後のホトトギス歌は、逆に弟から兄へ贈られている。

#### 霍公鳥を詠む歌二首

橘は常花にもがほととぎす住むと来鳴かば聞かぬ日無  
けむ(十七・三九〇九)  
珠に貫く棟を家に植ゑたらば山ほととぎす離れず来む  
かも(十七・三九一〇)

右、四月二日に大伴宿祢書持、奈良の宅より兄家持に贈る。

橙橘初めて咲き、霍公鳥颯り嚶く。この時候に對  
ひ、詎そ志を暢べざらむ。因りて三首の短歌を作

りて、鬱結の緒を散らさまくのみ。

あしひきの山辺に居ればほととぎす木の間立ち潜き鳴  
かぬ日はなし(十七・三九一一)

ほととぎす何の心ぞ橘の玉貫く月し来鳴きとよむる  
(十七・三九一二)

ほととぎす棟の枝に行きて居ば花は散らむな玉と見る  
まで(十七・三九一三)

右、四月三日に内舍人大伴宿祢家持、久邇の京より弟書持に報へ送れり。

書持は、天平十八年秋に突然死去して、孤独な家持に衝撃を与えている。しかし、歌は家持にいい刺激を与えている。まず独自の歌語としては「常花」がある。いつも咲いている花の意味で用いたのであるが、万葉集ではこの一例である。橘は、「時じくの 香の木の実」(十八・四一一)がなるのであるから、「時じくの花」として、即ち「常花」を考えたのであろうが、優れた書持の造語である。家持は天平十九年の三月の歌で、「常初花」(三九七八)とうたっている。

妹も我も 心は同じ 比へれど いやなつかしく 相



見れば 常初花に 心ぐし 愛しもなしに はしけや  
し 我が奥妻 (略) (十七・三九七八)

妻大嬢の形容に永久の初花の如く心惹かれるとしている。当然書持の歌語の影響も考えられる。女性の姿が「常初花」とあるが、永久にと願うのは、現実には逢えないことから来るのであろうが、「初花」を「常」とするのは、無理があつたのであろう。面白い造語であるが、この後に用いられない。

内舍人時代、越中時代、少納言時代にそれぞれ併せて十六首もホトトギスをうたいながら、年代が確定的な天平十三年弟の贈答に始まるのが亡妻の形代としてのホトトギスの存在である。そもそもホトトギスは、巻十に夏の雑歌、夏の相聞歌として、三十五首がある。そこでも歌としては、植物と関連する言葉として「珠に貫き・交へて」、植物として「卯の花」「橘の花」「菖蒲」等、ホトトギスの動作としては、「来鳴き」「渡る」など、さらに時期的なこととしては、「未だ鳴かない」、或いは「待ち焦がれる」とかがうたわれる。さらに鳴き声を聴いては偲ぶと言う様な形式的な歌が多い。下田忠氏は、万葉集のホトトギス歌を「幽明を結ぶ鳥」「人を結ぶ鳥」「待ち焦がれる鳥」「孤愁を呼ぶ鳥」

「風雅の鳥」という分類を試みている<sup>(1)</sup>。その分類からは、幽明を結ぶ鳥として弟書持との贈答歌は、ホトトギスがうたわれている。当然、孤独も強まる。恋の橋渡しをするのであれば、人を結ぶのであり、鳴き声を待ち焦がれ、孤独をさらに意識させたり、或いは風雅の鳥ともなる。そのいずれもが越中守以前の家持によつてうたわれている。

家持は、越中に赴任してから二ヶ月ほどを経た九月に弟書持の死が伝えられた。残された歌がわずかであるために歌人としての力量も推し量りにくいのであるが、兄弟の贈答を読むか限りは、書持は庭に花などを植えていることの好きなことからも知れる風流の人物である。翌年の天平十九年一月であろうか、家持自身も死を考へてしまう程の大病を患う。やや回復してからは歌友として池主の存在が顕著になった。有名な山柿の言葉が三月三日の序(十七・三九六九)に登場して、さらに両者は創作に意欲を燃やしている。ホトトギスは、三月二十日の歌からうたわれ、五月二日までに家持は、十群の歌作を試みた。その中では、四月二十六日国守館で開かれた宴席歌(三九九九)を除き、他の九群は全てホトトギスを含めてうたう。有名な万葉五賦を含む歌作の日々である。

ところで、習作時代にあまたの女性と相聞歌の往来が

あったのであるが、越中では宴席の歌と独詠の歌にほぼ終始する。その中でまず注目したいのが「山柿」に言及した三月三日の序がある。次には、ホトトギス歌の考察からは「五賦」も興味深い。山柿が歌を作る理念を述べたものであれば、さらに京にいる人へのお土産の歌が池主と家持の万葉五賦である。越中を紹介する意図は、家持の二上・布勢の水海・立山の三賦に具体化された。

しかし、この論では妹の存在に注目している。そこで京にいる妹を思つて詠んだという珍しい恋をうたう歌を取り上げる。三月二十日には、妹がいないので寂しいと感じる心、即ちそれが恋緒であるとする歌を作っている。万葉集の「恋ひ」とは、直接逢つていないので寂しいという感情である。長歌と短歌で現実には逢えないところからくる寂しさをうたうのは、恋の本質である。短歌の一首だけ紹介する。歌は、現実には逢えないので夢で見ても恋心は止むことがない、と言う。

あしひきの山き隔りて遠けども心し行けば夢に見えけり  
(十七・三九八一)

引用した歌を含めた京にいる妻を思う歌(三九七八〜三

九八二)は、表面的に妻坂上大嬢をうたっている。しかし、その中で「常初花」(三九七八)等の表現からは、書持の「常花」を用いた歌から死者の面影も付きまとう。また、引用した歌などは、一般的には夢で逢うのは、妹が家持を恋いしているからであるうが、わが心によつて妹が現れるなどはどう考えても一般的ではない。どうもこの恋歌も表面と裏腹な陰りがある。本当に妹に贈つたのであろうか。後に五百個の真珠を贈りたいと願う相聞歌(十八・四一〇〜四一〇五)があるが、真珠の数が数だけに虚構的な妹の存在を考えさせてしまい、これも実際に贈っていたのであろうか、と思つてしまう。とにかく守赴任から二年目の天平十九年の越中では歌友池主を見いだしていながら、その一方で都を強く意識して作歌しているのが家持である。恋をうたつてから九日後には、越中で初めてのホトトギスを主題とする歌があり、越中の風土と京との対比の中で生じた感情をうたう。

立夏四月既に累日を経たるに、由し未だ霍公鳥の喧くを聞かず、因りて作る恨みの歌二首

あしひきの山も近きをほととぎす月立つまでに何かれ  
鳴かぬ(十七・三九八三)

玉に貫く花橘を乏しみしこの我が里に来鳴かずあるらし  
(十七・三九八四)

霍公鳥は、立夏の日に來鳴くこと必定す。また越中の風土は、橙橘の有ること希なり。これによりて、大伴宿禰家持、懷に感發して、聊かにこの歌を裁る。〔三月二十九日〕

家持は、京を常に意識していたのであるが、越中の風土に親しむ気持ちが増してくると越中の地名を歌に積極的に取り入れてうたう傾向がある。左注では、越中と京の風土の相違が話題になっている。何気ないことに思えるが、天平時代の貴族に鄙の風土に注目している人物が存在していることに驚く。三九一一番でも用いた「橙橘」とは家持の独自の表現であるが、橘のことであろう。橙橘が越中で少ないことと立夏の日には必ずホトトギスが鳴くことが対比されている。書持への贈歌で家持は、山辺では必ずホトトギスが鳴いているとうたった。また、京では立夏にはホトトギスが來て鳴くと言う。立夏が過ぎていて、さらに山が近いのに鳴かないのは、京と違うところである。

一方ホトトギスは、家持の待ち望んだ鳥である。夏に來て、秋に去る。アヤメ、卯の花、橘などの花の時期と重な

る頃に鳴き始め、初秋の頃に鳴きやむ。寒い冬に弱く、孤愁の歌人であり、春愁の詩人である家持にとって、越中では立夏が待ちに待った季節の到來を告げる時でもあったのであろう。ホトトギスが鳴かないといって恨みの歌まで作る。ホトトギスに関しては、全作品が六十六首を数えるのであるが、越中時代の五年間で四十六首をつくる。とりわけ天平勝宝二年家持三十三歳の時に二十二首という多作が目につくのであるが、亡弟・亡父・そして亡妻の代としての存在がホトトギスにある。その延長上にありながら個人的なのが月に向かって鳴くホトトギスである。

四月十六日夜裏遙かに霍公鳥の喧くを聞きて懷を  
述ぶる歌一首

ぬばたまの月に向かひてほととぎす鳴く音遙けし里遠

みかも (十七・三九八八)

右大伴宿禰家持作之

ホトトギスは夜も盛んに鳴く。その鳴き声を「鳴く音遙けし」としている。家持の歌語に「霍公鳥鳴くなる声の音の」(十・一九五二) まである。声を音として理解しているのであるがその感覚は、声を省略して音と直裁的に表現し

ている。二上山の里に家持は越中時代過ごしているという感覚であったが、泣き声が遠いと感じるところにおぼつかない状態の家持がいる。京にいた人というよりも、亡妻のみならず父旅人・弟書持という死者のいる場所を遙か遠くに感じているからであろう。

越中でホトトギス歌の創作には池主の存在が「望郷の念」と共に「追懷の念」として強く働いたと強調するは、佐藤隆氏である。贈答などを配慮すればその結論も当然である。しかし、ホトトギス歌は、やはり独詠に特質が見られる。

歌数も越中時代では四十六中で、宴席が七首、贈答が十二首、さらに独詠が二十七首である。

或いは、池主に贈ったホトトギス歌（四一七七～四一七九）を、家持の「感旧の意」という過去を回顧して現在を嘆息する感情から作られているという西一夫氏の説もある<sup>(13)</sup>。また、ホトトギス歌に対して中西進氏の指摘する亡弟書持等の存在も大きいし、さらに亡妻に対する思いも配慮してよい。一方、鄙と京という対比もホトトギス歌の創作と結びつく。越中から帰任後のことを考えれば当然のことである。越中時代には、五年間で四十六首のホトトギス歌と呼ぶものをうたっていたが、三十四歳から四十二歳までの足かけ八年間では、三首の歌だけである。越中時代の総

歌数は、二百二十三首であり、少納言時代は九十一首であり、ホトトギス歌の比率もすこぶる劣っている。

天平勝宝二年という年が越中赴任足かけ五年目になる。家持は三十三歳になった。一、二月の歌はないが、三月になると俄然歌を作り出す。大鷹の歌（十九・四一五五、四一五六）、や憶良の歌に追和した大夫が振うるを願う歌（十九・四一六四、四一六五）等の創作の後、長短併せて九首のホトトギス歌を作る。さらに越前の池主へホトトギス歌として長短三首を贈っている。月とホトトギスの組み合わせは典型的なものであるが、月に照らされて鳴くホトトギスの姿がうたわれている第一反歌は、珍しい。また、第三反歌は、ホトトギスを飼育すると言う。これも鳴き声を愛するために野鳥を飼育すると言うのは、これに勝る方法はないのであるから、究極の鑑賞である。

まず題詞に「霍公鳥を感むる情に飽かずして」とあり、反歌にも「聞けども飽かず」とある。この三月と四月は、ホトトギス歌を作ることに熱中したのであるが、その中で興味を引くのがこの「飽かず」という言葉である。三月二十日にうたった長歌四一六六番の結びでも「暁の 月に向ひて 行き還り 鳴き響むれど いかに飽き足らむ」とあって、「飽きるだろうか、いや飽きない」とうたう。さら

に「聞けど飽き足らず」(四一七六)「聞けども飽かず」(四一八二)とあり、大伴池主・久米広縄に贈る歌や宴席の歌ではない、興などによって詠んだ独詠の歌で用いられている。ここに家持のホトトギス歌の個性があった。即ち、ホトトギスを愛でるのは、鳴き声に尽きるのであり、その鳴き声をいくら聞いても興味の尽きることがなかった天平勝宝二年三月、四月であった。そのためには、飼育も辞さないと言っているのである。

#### 霍公鳥を詠める歌一首

木の暗の繁き峰の上をほととぎす鳴きて越ゆなり今し  
来らしも(二十・四三〇五)

右の一首、四月に大伴宿祢家持の作。

ほととぎすまづ鳴く朝開いかにせば我が門過ぎし語り  
継ぐまで(二十・四四六三)

ほととぎすかけつつ君が松陰に紐解き放くる月近づき  
ぬ(二十・四四六四)

右の二首、二十日に大伴宿祢家持興に依りて作る。

引用した三首は、守から都に戻った少納言時代の詠歌である。天平勝宝四年と五年は、ホトトギス歌がない。四三

〇五番は、越中から帰任して三年たった天平勝宝六年の四月の作品である。卷八の一四八六番にも「木の暗」がうたわれていたが、青葉茂る夏になった状態が「木の暗」であるが、当然ホトトギス鳴いていいという季節感に基づいている。このホトトギス歌は、四月の作であるが、同月に引き続き秋の七夕歌を八首(二十・四三〇六・四三一一)をうたっていて、心情の連続を伺わせる。即ち、ホトトギスをうたうことで亡妻への追想が強まり、さらに七夕歌に収斂されていくのである。

次の四四六三番と四四六四番は、天平勝宝八年四月二十日の詠歌である。難波の堀江で詠んだ三首に連続して詠まれている。風雅なホトトギスの憧れと君と呼称する人へのいたわりを詠んでいる。

#### 結 び

家持は鳥が好きである。しかし、作品を見る限り長歌には、鶉、タカとホトトギスだけが詠われている。やはり、特質がどうであれ、わざわざタカを長歌でうたうということからも特別である。ヒバリとウグイスは春愁と結びつくところに個性がある。しかし、歌として独創的なのはホトトギスにあるといえる。ホトトギスは好ましい鳥であった。

すなわち、大伴家持は、ホトトギスが大好きであった。鳴き声、さらに故人を思い出させることもあってか、夏が近づいてくると歌の創作に強い刺激を与えた。立夏を過ぎて鳴かなければ鳴かないで、鳴き声に執着した。

ぬばたまの月に向かひてほととぎす鳴く音遙けし里遠  
みかも（十七・三九八八）

引用した歌などは、霍公鳥の特質と個性的な月に向かって鳴くということから、秀歌として評価されていい家持の代表的な歌である。そもそも月に向かって鳴くというのが着想のさえである。<sup>(15)</sup>真夜中も鳴くが、姿など見えないであろう。ところが、いかにも確信をもってホトトギスが月に向かって鳴くとうたう。それは、月に若返りの水「をち水」があるからである。

足かけ六年間の越中時代にホトトギス歌が長歌を含めて多作されている。独詠の歌を主な対象として、ホトトギス歌の背景に亡弟と亡妻のあることを縷々述べた。とりわけ独り居て詠んだホトトギス歌は、亡弟、亡妻の存在、さらに、越中という風土も創作に関わるのであり、都から遠いことが都を追慕して、さらに雅な世界も憧れさせた。宴席

と贈答も試みられているが、一番多いのは歌の創作した場が知られる越中では、二十七首の独詠である。最初の国守生活でついつい鬱状態にいたること、橘が少ない雪国であり、冬がつかったことから春が待望されていたし、待ちに待つホトトギスが案外立夏を過ぎても鳴かなかったこと等が、複雑に絡み合って独詠という場で創作した。天平勝宝二年は、さらに聞き飽きることのない鳴き声であるという思いに執着したことが、創作する意欲に結びついていたのである。

#### 注

- (1) 『詩心―永遠なるもの』（中公新書）八八から八九頁  
家持の国際感覚とは、渤海国の存在は自明であっても、その他の北方民族についてどの程度の知識があったのであるうか。さらにシベリア北部、西部には、さまざまな民族があったことは、韃靼など渤海の遣唐使などで知られる。
- (2) 『万葉集釈注（十）』 六七四頁
- (3) 『伊勢物語』東下りの章段の歌―景物に対応する行為の表現―（『広島女学院大学論集』第60集）
- (4) 『詩心―永遠なるものへ』（中公新書）九八から九九頁
- (5) 「鷹の歌」（『万葉の歌人と作品第8巻』所収）二二八頁
- (6) 『万葉集釈注（九）』三一七頁

- (7) 『大伴家持研究序説』第二章 表現の特色 一三七頁
- (8) 「家持の『立ちくく』『飛びくく』の周辺―万葉集における自然の精細描写試論―(上・下)」(『国語と国文学』第四十卷一・三号)
- (9) 「万葉集の動物二 鳥 特に集中難解の鳥について」(『万葉集大成 民俗篇』)
- (10) 「鳥の古代(三)」(『日本大学校文論叢』第47号)
- (11) 「万葉のほととぎす」(『福山市立女子短期大学紀要』第十七号)
- (12) 「越中守大伴家持とホトトギス―歌友大伴池主を中心にして―」(『美夫君志』第四十四号)
- (13) 「家持の『感旧之意』―池主に贈るほととぎすの歌―」(『筑波大学日本語と日本文学』第二十号)
- (14) 『大伴家持(4)』には、「いずれにしても、ホトトギスはいにしえを恋うる鳥である(第一巻 一二二ページ)。それを考えると、十七年前に亡くなった父旅人、二年前に亡くした弟書持への思慕がこの中にこめられている」と、巻十八にある田辺福麻呂の宴で披露された天平二十年のホトトギス歌(四〇三五)でいう。このような指摘はホトトギス歌の随所で見られる。五八頁。
- (15) 月に向かってホトトギスが鳴くのは、月に「をち水」があるからとしたが、不思議な月の性格については、「大伴家持の『月歌』―不思議な月―」(『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第十四号)で論じた。



越中	3971	鶯
	3978	霍公鳥 鶉鳥
	3983	霍公鳥
	3987	鳥
	3988	霍公鳥
	3991	鶉 アジ鴨
	3997	霍公鳥
	4006	州鳥 霍公鳥
	4007	霍公鳥
	4011	鳥つ鳥 鳥 鷹 千鳥 葦鴨
	4012	鷹
	4013	鷹
	4023	鶉
	4030	鶯
	18 4043	(霍公鳥)
	4051	霍公鳥
	4054	霍公鳥
	4066	霍公鳥
	4068	霍公鳥
	4084	霍公鳥
	4089	百鳥 霍公鳥
	4090	霍公鳥
	4091	霍公鳥
	4092	霍公鳥
	4094	鶉
	4101	霍公鳥
	4106	鳩鳥
	4111	霍公鳥
	4116	霍公鳥 鶴
	4119	霍公鳥
	19 4141	鳴
	4144	燕 雁
	4145	(雁)
	4146	千鳥
	4147	千鳥

## 家持歌の鳥

習作	8	1441	鶯
		1446	雉
		1563	雁
		1566	雁
		1567	雁
		1477	霍公鳥
		1486	霍公鳥
		1487	霍公鳥
		1488	霍公鳥
		1490	霍公鳥
		1491	霍公鳥
		1494	霍公鳥
		1495	霍公鳥
	4	715	千鳥
	3	466	水鴨
	8	1507	霍公鳥
		1509	霍公鳥
		1629	山鳥
	17	3911	霍公鳥
		3912	霍公鳥
		3913	霍公鳥
越中	4	775	鶉
	3	478	鶉雉 (とり)
	17	3916	霍公鳥
		3917	霍公鳥
		3918	霍公鳥
		3919	霍公鳥
		3920	鶉
	17	3947	雁
		3953	雁
		3966	鶯
		3969	鶯

越中	4207	霍公鳥
	4208	霍公鳥
	4209	霍公鳥
	4210	霍公鳥
	4234	鶉
	4239	霍公鳥

少納言	19	4286	鶯
		4287	鶯
		4288	千鳥
		4290	鶯
		4292	雲雀
	20	4305	霍公鳥
		4333	鶉
		4360	アジ鴨
		4398	鶴 群鳥
		4399	鶴
		4400	鶴
		4408	春鳥
		4434	雲雀
		4445	鶯
		4462	都鳥
		4463	霍公鳥
		4464	霍公鳥
		4474	群鳥
		4490	鶯
		4494	水鳥の鴨
		4495	鶯

越中	4148	雉
	4149	雉
	4154	鳥 鷹
	4155	鷹
	4156	鳥つ鳥 鶉
	4158	鶉
	4166	霍公鳥 鶯 鳥
	4168	霍公鳥
	4169	霍公鳥
	4171	霍公鳥
	4172	霍公鳥
	4175	霍公鳥
	4176	霍公鳥
	4177	霍公鳥
	4178	霍公鳥
	4179	霍公鳥
	4180	霍公鳥
	4181	霍公鳥
	4182	霍公鳥
	4183	霍公鳥
	4189	霍公鳥 水鳥
	4190	鶉
	4191	鶉
	4192	霍公鳥
	4193	霍公鳥
	4194	霍公鳥
	4195	霍公鳥
	4196	霍公鳥